

環境を考える経済人の会 21 2003 年度第 3 回朝食会

岸田袈裟氏（元 JICA 専門員） 2003.6.24

「アフリカ生活 25 年 人類の足跡を追って」

平野 本日のゲストは、25 年間ケニアでいろいろな活動をされて日本に戻られた岸田袈裟さんです。

NHK などでも岸田さんのご活躍ぶりは紹介されたことがありますので、ご存知の方がいらっしゃると思います。JICA の栄養学の専門家ということで赤道直下のケニアに行かれたのですが、むしろ日本で昔から使われていた蚊を避けるための蚊帳、カマド、わらじなどを現地で作るご指導をされました。そして衛生面でも、栄養学からさらには人口問題にも助言をされたようです。そのようなことがたいへん効果があったということで、注目された海外援助活動だったと思います。

アメリカに 28 年、人類の足跡をたどるのがきっかけ

岸田 私は 28 年間という年月をアフリカで過ごしました。私にとってこの 28 年というのは、特殊な数字です。グアム島で横井庄一さんが発見されたときが戦後 28 年目でした。ですから、私はアフリカのジャングルで同じ 28 年を過ごして「ただ今、日本に参りました」という感じがしています。グアム島の横井さんになぜ私が思いがあるのか。当時私は若かったのですが、横井さんがジャングルの中で何を食べ、何を考え、どのような生活をしてきたのかということを知るために、発見と同時に当時研究所にいた恩師で栄養学の大家の川島四郎先生の助手としてグアム島に飛びました。そして栄養調査をしたのが私の人生を狂わせたのです。それが海外での初めてのフィールドワークでした。それからいろいろなところを周ってアフリカに 28 年、私の足が止まってしまったということです。これが私のバックグラウンドのルーツのルーツです。

それでは、なぜ私がアフリカなのか。28 年もなぜアフリカにいたのかというポイントの一つですが、現在の説では東アフリカが人類の発祥地と言われています。そこで発祥した人間が地球全体をカバーするまでに繁殖した生物界の一つ、動物界の一員、この一動物がどのようなプロセスで歩んだのか。人類の足跡を見るのにはここが一番いいということです。私は 1973 年に初めてアフリカに行きました。その前にいろいろなところを周ったのですが、どうしても気になるところがアフリカでした。

人類の発祥地からどんどん地球を周って、その発祥の地の人たちは何をどのように生活していたのか。私の専門は栄養と食べ物ですので、何を摂って生きてきたのかということで足を踏み入れました。当時、私は真面目に栄養学を勉強していました。1973～1975 年と 3 年間続けて調査に行ったのですが、私の大学で習った、あるいは研究室で研究している栄養学というものが、全く通用しない世界があったのです。どうしても自分の習った論理に当てはめてみようとするのですが、どうしても当てはまらない。どうしてなのか。一步進んだと思えばまた逆戻りで、まるで蜃気楼を追っているような 3 年間でした。それからさらに 10 年間があつという間に過ぎてしまいました。そし

て、その 10 年間で私は現代栄養学の物差しを捨てることにしたのです。そうでなければ、どうしても理屈が合いませんでした。そこから私の本当の意味でのアフリカ人とのお付き合いが始まったという実感を持っています。

そして、そういった迷い子の私を、いろいろな方がいろいろな角度から約 15 年ずいぶん支えて下さいました。それを何とかご恩返しをしたいといつも思っていました。私は 2 人の子供を持っていますが、その子供の世話から炊事洗濯まで全てやってくれて、私の勝手な行動を支えてくれた多くのアフリカ人がいます。それを何とか何かのかたちでご恩返しをしたいという気持ちがあったことと、私が国際協力事業団に職を得たことが重なっています。

今日お話するのは、私の人生アフリカ生活は 28 年ですが、その中の 10 年間にご恩返しするつもりでやってみた本当のグラスルーツのルーツの活動をご紹介します。今日お集まりの皆様は環境問題を考える財界人の皆様と伺っていますが、今日私がお話するのは全く財界人の皆様にはほど遠いかもしれません。しかし地球上を先進国と途上国という分け方をすると、先進国よりも途上国の人間のほうが多くいます。ですから、これを見逃して経済も環境も全てのことは運ばないのではないかと考えています。仮に財界人の皆様がこれからいろいろなテーマをお持ちならば、途上国人口に是非目を据えていただきたいと思います。

例えば、環境問題一つとってみてもエネルギー問題があります。途上国が大半のエネルギーを使っているということが、ケニアでもよく新聞で報道されます。しかし、「私たちはそれどころではない」という側面も彼らにはあるわけです。エネルギー一つを例に取った場合、体の外にあるエネルギー問題が大体は環境問題に取り上げられるテーマですが、私の視点は人間を動かすエネルギーです。自然の環境から取れたものを、私たちは食べて生命を維持しています。そこには密接な関係があり、切っても切れない間柄だということを私たちは意外と日常的にわかっていない。また、途上国の人たちに環境問題を訴えるときに、一番わかりやすいのではないかと、環境理解へつながるのではないかと思います。環境問題があるからこそ私たちの生命の問題も次にやってくるのだという言い方が、一番途上国の人たちに環境問題をわかってもらえる素材ではないかと、経験上思っています。

私のライフワークは、食生活の変遷に伴い人類がどのように疾病と会い、そしてそれをどのように克服してきたのか、あるいはこれからどのような問題が発生するのかということの解明することです。それは地球の環境と全く一致する側面を持っていて、この 30 年間食生活の変遷に伴う人類の、特に疾病、環境問題を追いかけてきました。

ご承知のとおりケニアはアフリカ大陸のインド洋に面した国です。ケニアは 5 カ国に国境を接しています。ソマリア、エチオピア、ウガンダ、スーダン、タンザニアで、タンザニア側からたくさんの難民が押し寄せて点在している国で、人口の一番多いところが西部ケニアです。中心あたりがケニア山で、その南側に首都ナイロビがあります。東南のインド洋に面したところに、かつての首都モンバサがあります。大きな所では 3 カ所に人口が集中しています。ケニアというのは、3 分の 2 は半砂漠で農業ができない国です。

私の活動は主に、一番人口の集中が激しい西ケニアを対象にしました。非常に森が

少ない。30 年前までは国土の 17% あった森が、現在は 2.3% しかないという、非常に激しい減少度です。ビクトリア湖近くの西ケニアには、東アフリカではめずらしく熱帯雨林「カメガの森」があります。ここに今日お話しする三つのテーマがあります。

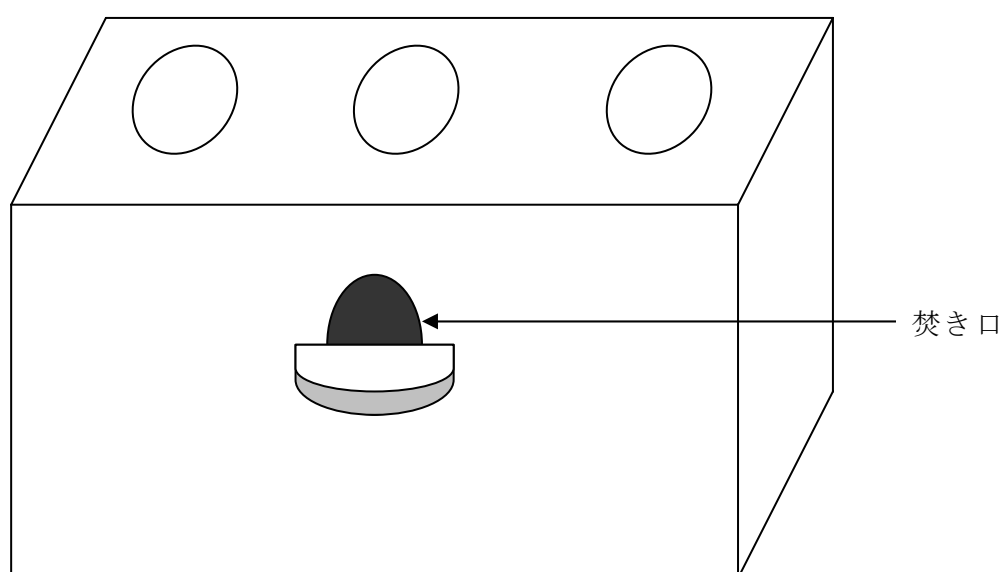
私はこの森を守るために、あるいは森を通して人々の命を守るために、いろいろな角度からいろいろな調査をした結果、やはり台所で燃やす薪を減少させなければいけない。あるいはその台所で衛生教育をしなければいけないというようなことから、究極は水に行き着きました。森のあるところに人間は自然に移り住むものです。ですから集中してしまうのです。つまり、水のないところには人間が住まないのです。この辺に人口が集中しているのは、森があるからなのです。しかしこの森が枯渇すると水がなくなるので、それが問題ということで、一つには薪が少なくてすむカマドをつくり、そして井戸を掘り、植林、環境教育などをやりました。

薪の少量化を目指して改良カマドを考案

今申し上げたことは普通のことですが、このあたりは住民による薪の使用率が非常に高く、国民の 84% が農民ですが、その 94% が薪に依存した生活をしています。ですから、薪によって森林破壊がなされ、これを何とかしようと思ひ薪の少量化を目指して改良カマドを普及しました。

ケニアの人々の台所状況ですが、三つ石を置いただけのカマドを使っている人たちが 96.8% もいます。家の様子は、カマドに直接影響するのですが、泥の壁の家が 94.6% あります。家を建てるのは女性の仕事です。薪を取りに行くのも女性の仕事です。約 20ℓ 水の入るポリタンクで午前中 2 回、午後 1 回水を汲みに行くのです。たいへんな重労働です。

私が考え付いたカマドを簡単に図にするとこのようになります。



腰を曲げずに焚き口が一つです。内側をトンネルを通して両方に炎がいくようにしました。ですから一度に三つのお料理ができる。今までは三つ石ですので、一つお料理

をしては外に置いて次のお料理をするのですが、その間にさっきのお料理は冷めてしまいます。ですから、もう一度戻してまた温めるという作業がありましたが、真ん中でお料理したものを左右どちらかに移しておけば、もう一度カマドに戻す必要がない。左右どちらかにはいつでも煮沸したお湯がある、というように衛生教育にもっていきましました。

それから私は現地の人に習ったのですが、左右どちらかには沸騰したお湯がいつでもある。もう一方にはお薬になる植物性のものを 1 日中煮ます。左右の炉口は温度がそう高くないので、ここで 1 日薬草を煮てお風呂に入るときに入れる、あるいは皮膚病の予防にする、もちろん飲むこともします。これは、現地の人たち自身が工夫しました。

私はこの活動をする前に、1991 年にある村を対象にフリークリニックをやりましました。そうすると子供のやけどが非常に多かったのです。それは三つ石のところでころんでしまうからです。そして、女性たちが腰が痛いと訴えました。もちろん感染症も多くありました。寄生虫も多くありました。それをどうやって解決しようかというのが、最初の私の悩みの種でした。このカマドでかなりいろいろなことが解決された。

実際に普及してみようということになりました。煙突を付ける付けないはつくる人の選択にしました。地域の人たちの中でリーダーシップを取るような人たち、日本で言うと婦人会の会長、副会長ですが、各グループから 2 人ずつ呼んで、25 グループ 50 人の規模でセミナーをします。それには 10km 圏内の人たちが集まってきました。ですから、かなり範囲が広いのですが、代表者だけを集めてまず講義をしてデモンストレーションをします。そうすると、最初はサンプルをデモンストレーションするのですが、2 日間のセミナーで、最初の日には講義などをしてつくってみせる。翌日には自分たちでつくらせる。経験させて泥の調子がどうだ、感覚がどうだということを実際にやります。

煙突は自由自在に自分の選択技だと言いましたが、それはなぜかと言うと、日本でも囲炉裏であった煙の効用が実は生活上大事だということを教えられたからです。私は煙突をつけるべきだと思ったのですが、「煙突はいらない」。というのは、カマドの上に生の木を置く棚があります。煙を通すことによって乾燥させる。また、次の季節に蒔くトウモロコシなどの穀類の種をぶら下げます。燻製させると虫がつかないからです。それには住宅事情が絡んでいました。屋根と壁の間に 20cm 程度空間があります。ですから、カマドから出た煙が生木の乾燥や燻製の役割を果たして、外に逃げていく。そして、特にマラリアがアフリカでは問題なのですが、夕食をつくる 7 時前後はマラリアがたいへん発生する時間帯ですので、煙があつたほうが蚊に刺されない。ですから、煙突は付きたい人、付たくない人、家庭の事情、住宅事情によって選んでくださいという指導をしたのです。

そのような意味では、現地の人たちにいろいろと教わることも多くありました。私が主に力を入れた西ケニアでは、人口の 50% しか安全な水を飲むことができていませんでした。安全な水を飲めていない人たちを対象にして、カマドの両サイドの一つに壺を置いて、その横腹に蛇口を取り付けて煮沸したお湯がいつでも飲めるようにしました。それまでは、水を介在する疾病（腸チフス、コレラなど）が非常に頻繁に発生

していたのですが、煮沸することを覚えてからは全くないと言っていいほどになりました。「カマド設置＝感染症がなくなった」という結果を得ることができました。

この蛇口を壺にどうやって付けるかという講習会もしなければいけません。蛇口はこちらから供与して、セメントは耐水性と耐熱性と普通のセメントの 3 つをこね合わせたもので蛇口を設置します。もちろん蛇口はなくてもいいのですが、ただ蛇口を付けていないと、壺の上からコップなどで水を汲むのですが、そのコップ自体が汚れているとかえって危ないという側面もありましたので、なるべく蛇口を付けるようにと普及しました。

カマドのデザインをプリントして渡すのですが、間隔が離れ過ぎていたりすると非常に熱効率が悪くなります。物差しを持っていない世界ですのでどうやって教えたかという、セミナーのときに 20cm の紐を皆さんに与える。「それを半分にすれば 10cm になります、それを倍にすると 40cm になります」という方法と、向こうの人たちは手が大きく手首から指先までが 20cm 程度あり、手の横幅が 10cm 程度あるので「手尺でも測れます」という一つの教育手法です。

改良カマドとソーラーを併用して、薪が 10 分の 1

そのようなことを言いながらも、どんどん広がっていきました。それにしたがって、薪が 4 分の 1 で済むようになったと村人が気がついて、私に報告が来ます。自分たちが一番わかるのです。今までは毎日薪を取りに行かなければいけなかったのが 4 日に一度で済むようになったということは、誰よりもこれを使うユーザーが一番よく知っています。三つ石を置いたものと岸田カマドの沸騰について比較しましたが、沸点まで上昇する時間は三つ石を置いたものも岸田カマドも同じです。ですが、囲っているものとオープンなものとの違いですので、持続時間がまるで違います。そして、岸田カマドの方は緩やかに温度が下がっていきます。三つ石のほうは途中から急に下がります。水温が 70℃ があると雑菌その他がほとんど殺されます。これは公衆衛生の分野で実証されています。ですから、「真ん中は煮炊きして両サイドに壺を置いて、本当に飲み水になるのか」ということを実証できました。これは専門家に頼んでやった実験ですので、信頼がおけると思います。

さて、カマドはやりましたが、さらに薪を使わない方法はないかと私は考えました。そこで考えついたのが太陽熱を使ったクッカーです。ダンボールにアルミホイルを貼ったものです。少し角度をつけただけなのですが、これでご飯が炊けます。野菜は何でも炊けます。お芋も 2～3 時間で煮えます。しかし、それも嘘ではないかとたいいていのは疑問を持ちます。ですから、何かをやるには、必ず立証作業をしなければ人様に申し上げられないという苦しみがあります。それで私は一般の人たちが持っている台所にあるものを全部総動員して、ケニア 5 ヲ所（高地、低地、民族の違うところなど）で実験をして歩きました。それこそ鍋、釜、ガラクタをトラックに積んで 5 ヲ所を歩いて実験作業をしました。鍋を黒く塗ったもの、黒く塗っていないもの。壺でも、バケツでも、ポリタンクでもどのくらいの上昇気温を示すのかということの実験をしました。

ケニアの沸点は 92℃ 前後なのですが、本当にかんかん照りのときには 1 時間で 87℃

まで上がる。これは暑かったときの実験の結果だったと思いますが、つまり 65℃までは 1 時間ないし 4 時間で熱くなりますので、それも飲める対象にはなるのですが、ただ、間違えるとバイ菌が培養されていることになるので、これは飲むということには一切触れていません。例えば、65℃まで上がったお料理、半分煮上がったものを先ほどの岸田カマドに移せば、まだ必要だった薪の 4 分の 1 がもっと減少します。あるいは逆にシチューなど半煮えになったものをお昼に外に放っておくと、夜にはたいへんおいしいシチューができています。じっくり煮る料理には非常にいいです。

私の計算では、三つ石のカマドをやめてソーラーと改良カマドを合わせて使うことによって、薪の量が 10 分の 1 に減ることが立証されたと思っています。

いろいろな普及活動をしたのですが、今度はアンケートをつくって同じ人たちを回って調査したところ、「自分のカマドやソーラーを使うことによってあなたの人生は変わりましたか、変わりませんでしたか」という単純な質問でした。そうすると 100% 「変わりました」という答えでした。その結果、私が今日申し上げたかったことなのですが、「何が変わったか」という質問をしたら、1. 薪がセーブされたということです。そして、2. お料理の時間が少なくなって別の仕事ができるようになった。これは別な意味でたいへん意義のあることだと思います。ところが、これは私も驚いたのですが、3. 環境保全になるという意識が芽生えたということです。これは全体の 86% の人がそう答えた。これは、私はたいへん意外でした。というのは、薪がセーブされた、別な労働ができるということよりも高い数字だったからです。ですので、何かしら具体的に自分たちがやることによって環境に対する意識が芽生えるのだということの一つの手法、開発につながったのではないかと考えています。

薬草の苗を育て、「菜園救急箱」を各家庭に

さて、ここで「薬を買う費用が減った」と答えた人が結構いました。もちろん衛生関係の調査もしましたが、何が薬を買うお金が減ったと感じたのかということ、環境保全、そしてカカメガの森があります。これは 240km² ある非常に大きな有名な熱帯雨林の森です。石弘之先生のお書きになった最近の本から抜粋してきたのですが、実はこのカカメガの森のことを石先生がお書きなっていて、私が案内したので同時にいろいろ勉強させていただいたのですが、「東アフリカで最も美しく生物多様性が高いと言われる熱帯雨林カカメガ・フォレスト」という表現をしていて、ここでは約 400 種類の樹木があり、霊長類が 7 種類います。鳥類に至っては 330 種類もいて、ヘビが 30 種類います。そして蝶が 400 種類います。この森にしか見られない鳥の種類が 62 種類もいます。石先生はバードウォッチングがお好きで、この森が今、約 3,400ha ずつ減っていることに、たいへん嘆かれています。最近この森が世界に有名になりました。それは前立腺癌に効く成分が発見されたかで、それを含有する「プルナス・アフリカーナ」という木を狙って、薬品会社がどんどん森に入ってきて伐採しているという新しい伐採問題が発生しています。

それで私は本当に伝統薬というのはあるのか、でたらめなのかわかりませんので市場調査をしました。「プルナス・アフリカーナ」の皮を剥いでそれが薬になるのですが、効くというと皮を全部ぐると剥いでしまいます。そうすると何百年と経った木が死

んでしまうのです。ですから、「使うことはいいけれども皮を全部剥いてはいけません。せいぜい 3 分の 1 にとどめておきましょう」という教育をしています。

それでは、その薬効たるや私たちも漢方薬や西洋医薬に傾いた時期もありました。漢方薬が廃れて、また見直されてきています。その立証作業をまたやりました。村の人たちが伝統的に使っている薬はたくさんあるのですが、分析して薬効が認められている植物、そして住民が今まで日常的に使っていた植物との突合せ作業を森に連れて行ってやりました。このようにセミナーを開いて、みんなに自分たちが知っている薬の材料を全部、一人一人が持ってきます。みんな共通して持ってきている植物がたくさんあるので、それを立証してもらった結果、伝統的な使い方が科学的に立証されているものであったということが私の驚きでもありました。

薪の使用量削減と植林を同時にやらなければいけない課題ですが、私には一度苦い経験があります。それは植林の普及をしようと思ったときです。私はたいてい婦人グループをターゲットに動いているのですが、婦人グループに苗木を育てさせて、いざ村をあげての植林になりました。そうすると女性たちが動かない。どうしたのかと思ったら、アフリカの人たちの習慣の中で「植林という作業は男性がするものであって、女性はやってはいけない」という習慣がありました。ですからどうしても植林作業が進まなかった。そのときには政府を動かして男性たちにやらせるというような、私の不勉強が私を一時苦しめたことがあるので、それでは子供のときから教育したほうがいい。男、女の作業ではないということを経験しようと思いました。子供たちに家からプラスチックバッグに牛糞を持ってこさせて、先ほど立証された 20 種類程度、かつ皆さんの生活の中に取り込まれている薬草の種をあげて、育てる作業をさせました。そして、ある程度になったときに各家庭に持って帰らせて、自分の家の救急箱の中に入れておく。私は「菜園救急箱」と言っているのですが、病人が発生してから森の中に入って行って、ヘビにさされたり森林保護官とケンカしたりといろいろな問題があります。その他に先ほど申し上げたように、木の皮を全部剥いてしまってせっかくの木を死なせてしまうというようなことを避けようということで、各家庭に木を増やしていく。それが将来的に森になるということが私の夢です。これは小学生がやっている作業です。これを始めてから今回 3 年目ですが、8,000m² ほどの土地を地域の人が私にくれたので、そこに全部薬草を植えて実験をしました。今では大きくなって満足しています。

教育の中には、森がどのように水にとって大事なのかということも行いました。「水は人間にとって大事です。皆さんも苦勞しているでしょう。良い水を飲みたいからには森が必要なのです」ということを教育します。「だからといって、水源に近いところに家を建ててトイレをつくってはいけません。多くの人たちが感染症にあいます」というようなことを教育します。

湧き水ですが、一つの湧き水にみんなが来て水を汲んでいたのです。ところが、家畜も来て水を飲んだり糞をしていくので、せっかくの水が汚れてしまう。それによってまた感染症が発生するというようなことを、ずっと繰り返してきました。それを何とか浄化しようということで、私が今回 100 ヶ所ほどつくったのですが、日本の伝統的な手法だと思いますが湧き水の奥に大きな水のタンクをつくります。それで石や砂

や木炭を入れてきれいな水がいつでも流れていてみんなが汲みにくるというものです。これも長い時間（約 3 年間）を掛けてフォローアップ実験をして、これでバイ菌がない水が飲める。

10 年でかなり普及した改良カマド、国連の行事でも展示

女性たちのカマドをつくり、ソーラーを利用しきれいな水が飲めるというような、一つのサイクルをつくりました。ですから、「ヒューマンライフには水が一番大事ですよ」という教育をすることによって、日常的に自分の問題としてみんなが考えるようになったということです。

私が行ったセミナーの開催地は、政府を通してやったセミナーですが、「私のプライオリティーはメインロード（舗装された道路）から 10km 以上離れていること。そして、ヘルスファシリティ（病院、クリニック）に歩いて 10km 程度いかなければたどり着かないところ」というような要求を出しました。ですが、私が選択するわけではないので結局ばらつきが発生したのですが、セミナーが終わったときに「あなたのエリアなりグループに帰って、今日やったセミナーの結果をどのくらい、例えば、カマドをどのくらいの人たちの世帯に広められると思う？」と軽い質問をしていました。押し付けではありません。その結果、ターゲットナンバーから実際につくったナンバーですが 193% です。一番多いところで 289% です。では、一番高くつくった人たちのファクターは何であったのか。もちろんメインロードから 10km 離れています。ヘルスファシリティからも 15km 離れています。ここは一度もそのようなセミナーを受けたことがないのです。生まれて初めてセミナーを受けたというところでした。先ほどデモンストレーションと言いましたが、最初につくってみるところの家庭のキッチンが、お金持ちだったか、普通か、あまり裕福でないかという三つの分け方をしました。メインロードから 10km 離れて、15km も病院がなく一度もセミナーというものを受けたことがない貧しいお家でデモンストレーションをしたというのが、一番効果がありました。では、一番少ないのはメインロードから 40km は離れていたのですが、ヘルスファシリティがすぐそこにある。そしてたくさんのセミナーを今までに受けたことがある。そこの少しお金持ちのお家でデモンストレーションをしました。そうすると、72% という比べ物にならない差が出てきました。これは何を物語っているのかというと、どんなにたくさんのセミナーを受けたからといってそれにしたがって行動が伴うかどうかというような一つの指標になったという気がしました。つまり、奥に入って病院もない。一度もセミナーを受けたことがないという人たち、本当のグラスルーツの人たちがいかに意識に飢えているか。熱気がまるつきり違います。何度もセミナーを受けたことがある人たちは、たいてい国連などがやっているのですが、シッピングフィーというのがあり、ただ出席しただけでバス代などがもらえるというシステムがあります。「岸田は何もくれないから二日目はやめよう」というような感じがありました。

国連が開催した砂漠化防止の大きなセレモニーを、北ケニアの遊牧民のところでやりました。ここに限らず、何か大きな行事があると今はこのカマドを展示品として、普及作業を皆さんがやるといったように国連の行事の中でも取り上げられるようにな

りました。これは約 3 万人集まったセレモニーだったのですが、みんながぞろぞろやってきていろいろな実験をし、女性たちが得意に先生になっているということが、私の最後のうれしい光景だったということです。それでひとまず 10 年間という区切りで日本に帰ってきました。

人間理解、地域理解が何よりも大事

私が申し上げたいことは、人が人を動かすことがどんなに大事かということです。どんなに良いことを私たちが提示しても、乗ってこなければ何もならない。私もこれをいきなりやったのではなく、それこそ 15 年間歩いて歩いて歩きまくって、いろいろなことを試行錯誤の上、ようやくこれで少し皆さんがついてきてくれるようになったのですが、一つおもしろい話があります。

マサイの村に行って、フライングドクター（飛行機で移動して治療をする医者）の大きな団体があり、そこに 80 歳のおばあちゃん医師がいて、先日もマサイのところに行ってマラリア対策の講義をしたそうです。大きなパネルを持って行ってハマダラ蚊が皮膚を刺すところを見せて、いろいろな教育をしました。そうすると、最後に長老が出てきて「今日は本当に良いお話を伺いました。なぜかという、私たちは非常に安全なところにいるということがわかりました」と言うのです。それはなぜかと聞くと、「私たちが住むところには、こんなに大きな蚊はいません」と言うのです。つまり拡大した蚊の表示を持って行ったら、それが実物大だと理解したとわかり、がっかりしたという話を私に訴えていて、私自身もビデオを見せたり、紙芝居を見せたりいろいろなことを過去にやったのですが、そのおばあちゃんの話聞いて、これは私の反省点にもつながるので、人間理解、地域理解が何よりも大事だ。ややもすると私たちは「これが良かれ」と思っているいろいろなことをやるのですが、一番思うのは先進国がやった反省点を途上国の人たちに繰り返させないということが、私たちの責務だと感じています。ですので、コミュニケーションのとり方が大事である。ですが、何があっても明るく楽しく生きているアフリカの人々が泣かずにすむように、私たちが導いていかなければいけない。リーダーシップをとっていかなければいけない。しかし、それには地域理解、人間理解が大事。今日は財界人の皆さんですが、何か商品開発したり、仕事をすると同じことが言えるのではないかと思います。

最後になりましたが、先ほどのソーラークッカーの普及にあたり、あるいはカマドのときもそうでしたが、3 年間にわたって公益信託地球環境日本基金から年間約 60 万～70 万円の寄付をいただき、これだけの成果が上がりました。私も JICA は任期が終わりフリーになって活動資金がなくなりましたので、是非皆さんのご協力で、土地の人たちが元気に普及活動ができたと思います。70 万円いただいたお金の重みはたいへん重かったです。ですから、ここでご報告申し上げて、私の話を終わらせていただきます。

三橋 岸田さん、貴重なご体験のお話をありがとうございました。それでは質問がある方は岸田さんに質問をして下さい。

松下 貴重なお話をありがとうございました。冒頭に横井さんの生活を訪ねたり、世界中を周ってアフリカへ行かれて、最終的には現代栄養学を捨てることになったというのですが、現代栄養学を捨てることになった理由を簡単に教えてください。

岸田 その一番の象徴で皆さんがご理解しやすいのは、私が当時行きました頃には、日本人の栄養摂取基準というものに塩分があり、当時は 15g が標準基準でした。今は 10g 以下ということですが、その 10g なり、15g の塩分をどう摂っているのかが大きな課題でした。それは塩というかたちで食べ物を摂っていない人たちに多く出会ったからです。まず、そこから入りました。まず塩分、そして全く野菜を食べない人たちに会いました。今、日本では 1 日 30 品目などと言っていますが、いまだにその基準からいくと死ななければいけない人たちばかりです。ですから、そういったことで全くわれわれが信じ込んでいた栄養基準表に合わなかった。ジャングルの中にいたので横井さんも塩分は摂っていなかった。それが何で補われていたのかというと、その人たちが住んでいる、グアム島でもそうですが、土の成分です。ナトリウムと塩素をどのくらい含んでいる土地に生えた食べ物を摂っていたか。そして、体内で塩化ナトリウムで塩分の働きをするということがわかった。人間は、摂取塩分としては 3g 以下でも、発散しなければ生きていけるのではないかとということ学んだからです。

岡部 今、野菜を食べない人たちがいると言われましたが、例えばライオンの場合肉食動物を食べて間接的に野菜を摂っている。そのような感じの生活が考えられるのではないのでしょうか。

岸田 たいへんうれしい質問をして下さいました。私が最初にアフリカに行ったのは、野菜が人間に必要なだということの勉強でした。では肉食動物はどのようなだろうということでライオンを追いかけました。傷をつければ血が出る同じ動物ですので、なぜ私たちと同じ赤い血が出てくるのかということが私の発想でした。そうすると、今では定説になっているのですが、これは私どもが言ったのが初めてでした。ライオンは草食獣しか追いません。なぜならば、草食獣の内臓です。狩をするとライオンは動物のお尻から開けます。そして特に小腸に詰まっている、胃に詰まっている半分消化されているものを手でしごいてのどを鳴らして食べる光景を見てライオンも野菜をとっているのだということがわかりました。

岡部 もう一つ、先ほどのアンケートで環境問題に対する目覚めがあったということですが、彼らの感覚は美しい、病気にかからない、などというかたちでの環境に対す

るアンケートの答えですか。どのような感覚で、環境の問題が非常にアンケートの中で多かったのでしょうか。

岸田 もちろん最初に薪がどうのということではなく、病気との戦いが減ったということです。これが大きな実感だったと思います。そして、年を追うごとに薪を取りに行く森が逃げていくと言うのです。だから年々遠くに行かなければいけない。元気であることと、植林をして何となく次もそうなる様子を見て安心したという意識の目覚めだと思います。

三橋 少し視点は変わりますが、岸田さんのような地元に入り込んでいろいろと地元の人たちを啓蒙していくということは外国人もやっているのですか。

岸田 はい。

三橋 そのやり方は例えば、岸田さんのような日本人とはだいぶ違うのでしょうか。

岸田 それもたいへんうれしい質問ですが、例えば今日私が挙げた三つの視点（カマド、ソーラー、水）は全部外国人がやっていたことです。ケニアはイギリスの植民地だったので、まだ独立して 40 年の若い国ですが、それ以上 150 年も前からソーラーは別としてやっています。今もやっています。私が始めたときもやっていました。しかし、普及しなかった。それはなぜかということがご質問のポイントになるかと思いますが、それは簡単なことで、私が思うには人々の中に入っていないからです。「これは良いものだからつくりなさい」という命令型です。私の場合は、「このような問題があるのだけれども、どうすればいいか」とみんなに考えさせました。こちらがアイデアを持っていても、それを最初から言わないという差だと思います。これは世界中の人たち、特に国連機関、NGO が、この 150 年間同じようなことをやって根付かなかったということを見えています。

三橋 岸田さんは日本人として 1 人で入り込んでいるのですか、何人かのグループでやっているのですか。

岸田 この 10 年間のうち、最初の 5 年間は人口教育促進プロジェクトを日本政府がやっていました。簡単に言うと人口抑制のプロジェクトで、日本人の専門家が 6 人いて、

例えばビデオ作成、教材作成の分野の人たちが一緒にやっていました。実はそれを使って普及作業をするという大きな目標で日本は始まったのですが、途中でそれはどうしてもだめだということがわかり、私独自の手法に変わったというプロセスがあります。フレームワークとしては、ビデオを見せ、教材を配り、ビラを配りということでした。ですが、最終的には私 1 人でやった感じで、そのような意味ではずいぶんプロジェクトの本質と違うということで最初はいじめられました。

三橋 JICA の活動についてはいろいろと聞いているのですが、専門員というのは相当過疎の地域に入ってやっていますが、JICA の組織と岸田さんとの関係というのはどのような感じだったのですか。

岸田 非常に特殊な存在で、私のような作業をするものは JICA に来るべきではないというのが彼らの考えでした。これは NGO の仕事なので取り違えているのではないかと、採用そのものからして私の場合は特殊だったと思います。いまだにその風は強いです。私は NGO だから、ODA だから、というすみわけをするのは間違っていると主張しています。ODA が NGO 的手法で「住民参加」などと言葉では言いますが、実際には入っていません。グラスルーツになると NGO にトランスファーするというのが、現在の様子でもあります。ですので、この機会を借りて申し上げますが、ODA こそが、いろいろなことで身分を保証されている人たちが、本当の意味での援助に取り組むべきではないかと思っています。早くハードなものの予算をこのような効果のあるものに、10 分の 1 でもいいから向けていただきたいというのが私の念願です。

三橋 一度 JICA の現場の話も聞いてみたいですね。

岸田 それがよろしいと思います。ただ、口では「住民参加、グラスルーツ」とたいへんうまく国民にはアピールしています。

三橋 岸田さんの今の話を聞いてみると、少し違うような部分があるのでしょうか。

平野 そもそも岸田さんのような女性の方がお 1 人でアフリカの村に入ることも自体が、JICA の勤務規定に違反するのです。そのような危険なことは認めないので、それは根本的に話し合わなければ、彼らは岸田さんのような活躍の場は、JICA は最初から念頭

に置いていないと思います。

岸田 ナイロビから 100km 以上離れるときには審査があり、非常に厳しいので皆さん出ません。

加藤 JICA の技術協力なりの仕方は、先ほどおっしゃったイギリスが 150 年前からやってきたようなものをお手本にしているのでしょうか。

岸田 そうです。お手本どころか、今は日本全体がそのような気がしますが、「アメリカに言われたから」、「国連に言われたから」、大きなテーマが国連なり、アメリカなりありますが、そのテーマにしたがってプランされるというのが実情だと思います。独自の発想でというのはあまり見かけません。

加藤 先ほど岸田さんについての本を拝見して、赤ちゃんとして生まれて、赤ちゃんとして死ぬというくだりがありましたが、まさにアフリカというのは人類が発生したところで、そこには何万年も前からずっとあの人たちは住んでいました。それなりにそこでその環境に適してサイクルが回っていたはずなのでしょうけれども、それがおそらくどこかで狂ってしまった。それで森が減るなど環境がずいぶん変化してきたのだと思いますが、その狂ったきっかけは何なのでしょうか。

例えば、カマドにしても、水にしても、日本人は日本人で江戸時代なりそれ以前からいろいろな工夫をしてきました。工夫しているのは日本人だけではなく、どこに住んでいる人もそうで、何かあったはずでしょう。それが途切れたのかどこかで違ったのか、そのようなものは感じられたのでしょうか。

岸田 爆発的な人口増加が一番の原因です。この 40 年間で 10 倍に人口が増えました。私がプロジェクトで行ったときには世界一人口増加率の高い国で、年間 4.1% を超えているという現状がありました。ですから、薪でもなんでも使わなければ生きていけなくなったことが大きな原因です。

加藤 なぜ人口が爆発的に増えたのですか。

岸田 なぜかというと、植民地時代から医療協力にずいぶん力を入れてきたので、乳児死亡率が減ったのです。ところが、乳児死亡率が減ったのですが、死亡率が高かつ

たときと同じ子供の数を生んだということが、大きなポイントだと思います。ですから、私どもが入ったときには平均で 7.5～8.5 人生んでいました。以前はたいていその半分は死んでいたのですが、死ななくなったので 8 人が 8 人育って子供の数が倍になるということです。非常に簡単なことなのですが、そのような背景があったと思います。

三橋 どうもありがとうございました。